『まんじ』128 号(2013.5)

北上夜曲考

新井　宏

カラオケは苦手であるが、お付き合いに「北上夜曲」を歌う。もう一曲となると「琵琶湖周航の歌」で間に合わせ、時には格好つけて「テネシーワルツ」を英語で歌うこともある。

昭和三十六年、紅白歌合戦でダークダックスが「北上夜曲」を歌った。その年の春、私に青春の彩りを添えてくれた「君」はそっと去っていった。

もうセピア色の中に霞んでしまったが、中学三年生の「テネシーワルツ」に始まり「野菊の如き君なりき」を経て、「北上夜曲」に至るまでの九年間であった。

その「去り行けし君」は、難病を患い、平成十年に六十四才の若さで亡くなっていた。賀状の交換が途絶えてから数年後のことであり、私が韓国に通い始めた頃であった。

そのことは、共に学んだ荏原四中が統廃校されるというので、同窓会の案内を送った時に初めて知った。ご主人からの丁重な返信には、病気の経過の後に「……生前、中学校時代の話はよく聞かされました。荏原四中の思い出は彼女の生涯の強い思いであったと思っております……」と添えられていた。

さて、最近になって、インターネット上で「北上夜曲」が盛岡第一高等学校の寮歌だったという話に出会った。マヒナスターズと多摩幸子の「甘ったるい歌謡曲」とばかり思っていたのに、実は戦前の学生歌であり、作詞者・作曲者も判らぬまま、歌声喫茶で流行っていたというのである。その方が我が青春を飾るにふさわしい。そして「北上夜曲」を調べ始めた。

匂い優しい白百合の　濡れているよなあの瞳
想い出すのは　想い出すのは　北上河原の月の夜
宵の灯点すころ　心ほのかな初恋を

想い出すのは　想い出すのは　北上河原のせせらぎよ
銀河の流れ仰ぎつつ　星を数えた君と僕
想い出すのは　想い出すのは　北上河原の星の夜
僕は生きるぞ　生きるんだ　君の面影胸に秘め
想い出すのは　想い出すのは　北上河原の初恋よ

北上夜曲の誕生

調べてみると、簡単に判る事であるが、戦前に「盛岡第一高等学校」などという学校はない。だから寮歌ではあり得ない。しかし歌声喫茶で作詞者・作曲者不明のまま「寮歌」のように歌われていたことは確かである。だから歌詞も曲もバリエーションが多く、世に出た経過にも諸説あった。通説を追いかけてみる。

昭和三十六年、雑誌『サンデー毎日』に、北上川の紹介として「北上夜曲」の歌詞が引かれていた。その一部に誤りがあるのに気がついたのが、作曲者の安藤睦夫である。

安藤は雑誌社に連絡して、盛岡一高と白百合女学院の生徒間の悲恋と言われていたことを否定、作詞者が菊池規であること、本来の詞と曲、更には「北上夜曲」の誕生した経過を明らかにした。

十七歳の水沢農学校生の菊池規と十六歳の八戸中学校生の安藤睦夫が、水沢(現奥州市)で出会って意気投合、翌年の昭和十六年二月に菊池規の「北上川のささやき～今はなき可憐な乙女に捧げる歌」と題した詞に、安藤睦夫が曲をつけて「北上夜曲」が誕生したというのである。

そして、ビクター、キング、東芝など六社が競って二十二種類のレコードを発売、日活など三社が映画を競作するというセンセーションが巻き起こった。

歌詞は、菊池規が水沢農学校在学中、下宿先近くの女学生に抱いた淡い初恋を歌ったものとされるが、実は初恋相手の女学生は存命で、その噂を迷惑がっていたとも伝えられている。文学少年であった菊池規は、岩手師範学校を出て、盛岡市内の小学校長を歴任、平成元年一月二十六日肺癌の為六十五歳で亡くなっている。寡黙のひとだったようで、「初恋」の事情をあまり語っていない。

一方の作曲者、安藤睦夫は、八戸中学から盛岡高等農林学校を経て、岩手県種市町の町会議員や農協組合長を歴任、作曲のかたわら作詩も行い、「北上夜曲」についても、対談や書き物に残している。平成十九年一月九日急性肺炎の為八十二歳で亡くなった。

「北上夜曲」の誕生の経過については、安藤睦夫が語っているし、作家の三好京三も「北上夜曲」(『北上川神楽囃子』所収)のなかで紹介している。

ふたりが出会ったのは、安藤睦夫の叔父で、水沢農学

校の配属将校だった清蔵の下宿である。大酒飲みで下宿料さえ滞納していた清蔵に、睦夫が父から言いつかってお金を届けに行った時、たまたま水沢農学校生で、郷土の詩人に憧れる菊池規が詩作ノートを持って来ていた。

ギターと作曲に夢中になっていた音楽少年の安藤睦夫は、菊池規と意気投合し、菊池の詩に曲をつけることを約束する。そして、菊池は「北上川のささやき～今はなき可憐な乙女に捧げる歌」と題する詩を彼に送った。

安藤は学年末試験が始まるという夜に曲を書き上げ、試験が終わると、ギターを携え、菊池の待つ盛岡の岩手師範学校へ向かう。「教師の卵たちは、ほとんどうっとりとして聞き入り、終わるとはげしく手をたたいた」という。題名はその時に「北上夜曲」と付け変えられた。それが昭和十六年二月のことである。

戦時下にありながら、甘く初恋を歌う「北上夜曲」がひそかに広まっていったのは、何よりも師範学校を卒業した教師たちによるところが大きいと思う。

しかし、もうひとつのルートとして、おそらく安藤睦夫の叔父の清蔵があったと思う。清蔵は、水沢農学校の配属将校の後に、黒沢尻中学の配属将校に転ずるが、その二年後の十八年には中尉として現役に復帰し出征、その壮行会の席で「飲み助叔父ァ、睦の作った流行歌でお別れしァんす」と美声で「北上夜曲」を披露したという。

話のわかる配属将校として、「北上夜曲」を配属先の中学校で生徒達に教えていたのではなかろうか。残念ながら、安藤源蔵は、昭和十九年の「玉砕ピアク島」で戦死する。そう言う時代であった。

昭和十六年は太平洋戦争の始まった年である。電波統制下のラジオは、軽音楽をいっさい廃して、軍歌や愛国歌を中心とした軍国調のプログラムに切り替えられた。そんな中で、「北上夜曲」の記憶が、わずかではあるが記されている。

中村守男の『私の北上夜曲』には、昭和十八年の夏、学徒動員で戦車隊演習場の抜根作業に来ていた中学五年生が、「北上夜曲」を歌っていたとある。また、三好京三も同十八年に一関中学で、相撲部の主将にして柔道の猛者である男が甘いメロデーの「北上夜曲」を歌ったことに驚いている。八戸中学、黒沢尻中学、一関中学、盛岡中学などの岩手県下中学校では、既に「北上夜曲」が流行していた。そこに安藤清蔵の影を見る。

このようにひそかに流行していた「北上夜曲」は、戦後になると岩手から上京した学生達を通して「寮歌」のように全国に広まって行く。その一方で、昭和三十年代になると歌声喫茶が流行、集団就職で上京した若者等によって、歌詞が変えられ歌い継がれる。岩手師範学校の卒業生たちが、教え子たちにひろめたのに違いない。

作者不詳のまま歌声喫茶で流行し始めていた頃、朝日

新聞は昭和三十五年十二月十四日付けで、学生達の好きな歌として取り上げ、高校生同士の悲恋を描いた歌と紹介している。原詩は岩手が生んだ石川啄木かも知れないとも書かれている。

北上夜曲の形式

「北上夜曲」を口ずさむと、似た語調や階調に気付く。それは七五調の詩に八分の六拍子のリズムを付けたものに集中している。思いつくままに挙げると結構ある。

北上夜曲（菊池規作詞・安藤睦夫作曲）
　にーおいーや　さーしいーー　しーらゆーり　のーー
惜別の歌（島崎藤村作詞・藤江英作曲）
　とーおきーわ　かーれにーー　たーえかーね　てーー
あざみの歌（横井弘作詞・八洲秀章作曲）
　やーまにーは　やーまのーー　うーれいーあ　りーー
愛国の花（福田正夫作詞・古関裕而作曲）
　まーしろーき　ふーじのーー　けーだかーさ　をーー
みかんの花咲く丘（加藤省吾作詞・海沼実作曲）
　みーかんーの　はーながーー　さーいてーい　るーー
いずれも、詞と曲を入替えても簡単に歌える。琵琶湖周航の歌（小口太郎作詞・吉田千秋作曲）もそのバリエーションである。

この他にも、七五調をやや外れるが、早春賦、宵待草、浜辺の歌、仰げば尊し、ゴンドラの唄、七里ヶ浜の哀歌、などが八分の六拍子で、ちょっと古風でロマンチックなのが共通する。

外国の歌にも、モルダウ、ローレライ、ホフマンの舟唄、野ばら、きよしこの夜などの名曲がある。その中でもスメタナの交響詩『我が祖国』第二曲「モルダウ」は、私の葬送の曲として勝手に決めているほど気に入っている。合唱曲としては、平井多美子の訳詞が良く歌われているが、出だしのメロデーも「北上夜曲」に似ているし、しかも七五調で八分の六拍子である。

どうも、八分の六拍子には「水」に関係する曲が多い。いま改めて例を挙げて見ると、北上夜曲を始めとして、モルダウ、琵琶湖周航歌、浜辺の歌、ゴンドラの歌、七里ヶ浜の哀歌、ローレライと続く。全て気に入りの名曲ばかりである。

だから、日本には、このように八分の六拍子の名曲がたくさんあるかと思うと、それは大きな誤解なのである。実は、野ばら社の『日本の歌』全七集を見ると、輯録された千六百六十五曲の内に八分の六拍子はたった二十七曲しかない。しかも、その内の二十一曲は戦前のもので、昭和四十年以降の作品はわずかに一曲である。

このことは、名曲の歴史としてよりも、むしろ文化・社会現象として論評すべきテーマである。だからもう少し立ち入ってみる。そのために作成したのが表1である。

八分の六拍子の名曲の内、更にベスト二十を選んで年代順に示した。

「北上夜曲」は昭和十六年の作曲であるから、明らかに戦前であるが、流行したのは昭和三十六年である。

同じように島崎藤村作詞の「惜別の歌」も終戦直前の作曲であるが、小林旭らによって流行したのは「北上夜曲」と同じ昭和三十六年である。更に「坊がつる讃歌」に至っては、昭和十五年の広島高師の「寮歌」を芹洋子がNHKの「みんなのうた」として歌ったのが昭和五十三年である。

これら三曲はいずれも戦前に誕生しながら、昭和三十六年以降に流行し、八分の六拍子の名曲の棹尾(掉尾)を飾ったのである。それ以降には、谷村新司の「哀歌」しか見当たらない。

すなわち、純正の戦後の名曲で八分の六拍子のものは、「みかんの花咲く丘」と「あざみの歌」くらいしかない。

しかし、実を言えば、どの名曲集にも採譜されていないが、もう一曲ある。木下忠司の「そばの花さく」である。昭和二十六年の映画『カルメン故郷に帰る』の中で挿入歌として、急遽作られた曲で、正式の楽譜がないらしい。二番の歌詞は「からまつの林をぬけて、岩清水湧くほとり、白樺は白く気高く、さ霧に濡れて立つよ」となっている。

「そばの花さく」が即興の曲とすれば、昭和二十一年の「みかんの花咲く丘」も、放送に間に合わせるために、二時間で作曲されたという。そこ

表1 のばら社の『日本のうた』に載る日本の名曲1665曲の中
6/8拍子の曲は27曲しかない。その内から更に20曲を選んで示す

曲　名	年	詩式	第一小節の歌詞
あおげば尊し	1884	八六	仰げば尊し　我が師の恩
＊灯台守	1889	八六	こおれる月かげ　空にさえて
＊ローレライ	1909	八六	なじかは知らねど　心わびて
＊野なかの薔薇	1909	七六	童は見たり　野なかの薔薇
＊七里ヶ浜の哀歌	1910	八八	真白き富士の根　緑の江の島
早春賦	1913	七七	春は名のみの　風の寒さや
浜辺の歌	1913	七五	あした浜辺を　さ迷えば
ゴンドラの唄	1915	七七	いのち短し　恋せよおとめ
琵琶湖周航の歌	1915	七五	我はうみのこ　さすらいの
浜辺の歌	1918	七五	あした浜辺を　さ迷えば
宵待草	1918	七五	待てど暮せど　来ぬひとを
＊モーツァルトの子守歌	1924	七七	眠れよい子よ　庭や牧場に
＊ヴェニスの舟歌	1926		棹さす小舟の　舵おたえ
愛国の花	1937	七五	真白き富士の　気高さを
坊がつる讃歌	1940	七五	人みな花に　酔うときも
北上夜曲	1941	七五	匂いやさしい　白百合の
惜別の歌	1945	七五	遠き別れに　たえかねて
みかんの花咲く丘	1946	七五	みかんの花が　咲いている
あざみの歌	1949	七五	山には山の　うれいあり
哀歌(谷村新司)	1978	七五	体に残る　傷でさえ

＊外国の曲による唱歌など。原曲の作曲年ではない。

から伺えるのは、八分の六拍子の作曲など、素養ある作曲家にとっては、極めて簡単に作れたと言うことである。それなのに、なぜ八分の六拍子の曲が流行しなくなったのであろうか。

それは日本の音楽教育において、明治期に大きな比重を占めた八分の六拍子の外国曲が、大正になり、古来の邦楽のリズムに押し戻されたことにあると思う。邦楽系は能楽をはじめとして、四分の二拍子や四分の四拍子が大部分である。それに対して、詳しくは調べていないが、外国では、野ばら社の『世界の名歌(原詞付き)』をみると、百二十一曲中に八分の六拍子の曲が十九曲もある。韓国にも八分の六拍子が多い。どうやら八分の六拍子が少ないのは、日本の特殊性らしい。

もうひとつの要因は、戦後の学校教育において画一的に親しまれた「唱歌」が廃されたことを挙げねばなるまい。それと共に、七五調や五七調の文語系の定型詩がすたれたことも大きな要因であろう。

さて、「北上夜曲」に戻ろう。安藤睦夫の「北上夜曲」に影響を与えた曲は何であったろうか。それは、表1に示した名曲の流れから見て、おそらく古関裕而作曲の「愛国の花」である。

戦意高揚を担った軍歌でありながら、そのメロデーは美しく、歌詞も「真白き富士の気高さを、心の強い楯として、御国につくす女等は、輝く時代の山ざくら、地に咲き匂う国の花」と気品がある。

戦後になって、歌唱が禁じられていたはずなのに、疎開先の村の演芸会で聞いた記憶がある。きれいな女学生が歌っていた。

石川啄木の影響

「北上夜曲」の作者不明であった頃、当然のように石川啄木作説も出ていた。郷里の偉人であってほしいとの願望もあったかも知れないが、年代は三十年も異なる。

それでは、詩人を夢見た十代の菊池規が、石川啄木から影響を受けていなかったであろうか。啄木が十九才の明治三十八年に刊行した処女詩集『あこがれ』を覗いて見る。

さっそく手応えがある。用語が似通っているのである。例えば(秋風高歌)と題する詩ひとつを取っても共通用語が続出する。「匂」が四個所、「白百合」が二個所、「せせらぎ」も一個所でているし、「胸」に至っては五個所も見いだせる。

これらは、詩的な用語であるから、偶然に一致する可能性も高いが、それにしても主要な単語のほとんどが啄木の若き日の『あこがれ』に数多く見いだせるのである。

もう少し統計的に示してみよう。「北上夜曲」の詩的な語彙について、啄木や藤村の詩集にどのように現われて

表2　北上夜曲の主要語彙と各詩集における出現数

詩集名	匂ひ	百合	瞳	ほのか	胸
啄木『あこがれ』	17	10	23	6	97
啄木『一握の砂』	0	0	1	2	4
藤村『若菜集』	3	1	1	0	7
藤村『落梅集』	0	2	0	2	26

いるか比較したのが表2である。

その用語の多くを如何に啄木の処女出版『あこがれ』から採っているか明らかであろう。それに較べると同じ啄木の『一握の砂』からはほとんど採られていない。

かくして、菊池規が石川啄木の詩集、とりわけ啄木が堀合節子と結婚する前の『あこがれ』から多大な影響を受けていたことが判る。

さてここで気付くことがある。あるいは、菊池規は「北上夜曲」の「今はなき可憐な乙女」に、啄木の初恋の人で、後に妻となった堀合節子を擬していたのではないか。そもそも啄木は節子を「白百合の君」と呼んでいた。明治三十五年十一月の日記には「朝めさむれば、枕頭に匂ふ白百合のみ姿あり、せつ子の君、杜陵より新らしき写真たまひぬ」とある。

共に満十三歳のとき出会い、節子は啄木の才能を信じ「愛の永遠を信じたく候」と周囲の反対を押し切って啄木と結ばれる。しかし、啄木は生活苦もあって、節子につらい思いをさせ続ける。おおまかに言えば『あこがれ』は節子との結婚前、『一握の砂』は結婚してからの作品なのである。

もちろん『あこがれ』は、当時としては、欧米の詩を背伸びして模倣した才気あふれる作品に違いないが、所詮は幼稚な借り物であった。『一握の砂』のように後世に残る作品ではない。しかし、文学少年の菊池規の心を捉えたのは、ひたむきな堀合節子であり、その薄幸に自らの淡い「初恋」を重ね合わせてみたのではなかろうか。

それは、「白百合の濡れているような瞳の君」が、巷説のように菊池規を避けていた女性であっては欲しくないと思う私の願いからなのである。

野菊の墓

「桜貝の歌」という名曲がある。歌詞に「うるわしき桜貝ひとつ、去り行ける君に捧げむ」とある。曲調は八分の六拍子の名曲に似るが、残念ながら四分の四拍子である。八分の六拍子の名曲「あざみの歌」を作曲した八州秀章が、初恋の人との死別を歌った名叙情歌で、その歌詞の「去り行ける君」が、わが青春に彩りを添え、そしてそっと去っていった「君」に重なる。

思い出すことがある。

「君」が去り行く少し前のことであった。薄暗い夜道で、「君」は確かに「年上でなければよかったのに」と

つぶやいたようだった。中学校の同級生であるから、年上と言ってもほんの数ヶ月。おかしなことを言うと思いながら、実は、私の母から何か言われたのではないかと直感した。しかし、その時に、それを確かめる勇気はなかった。

そして今、伊藤左千夫の『野菊の墓』を再読している。

政夫は十五歳、いとこの民子は二つ年上の十七歳であった。政夫の母が病気のため、民子は政夫の家に仕事の手伝いや母の看護のために来ていた。最初は幼い仲良しに過ぎなかったが、周囲の目がふたりを緊張させ、愛を目覚めさせる。

しかし政夫に年上の嫁を迎える訳には行かない。政夫の母は、早めに芽を刈り取ろうと政夫を町の中学校に送り出し、いやがる民子に無理やり縁談を薦め、嫁に行かせてしまう。そして産後の肥立ちが悪く民子は亡くなる。

紅絹の切れに包んだ政夫の写真と手紙を手にして亡くなった民子の姿をみて、政夫の母は号泣して詫びる。

「もしかしたら母が何か言ったかも知れない」という思いは、「単にふられただけ」という現実から逃避したい気持となって、時と共に膨らんで行く。いずれの日にか、人ごとのように、それを軽く「君」に確かめることができるかも知れない。そんな風にも思っていた。

しかし、今や母も亡く、「君」も逝ってしまった。

妻にそっと意見を求める。

私の母を「良く知る」妻は、「あり得たこと」と言う。それは単なる私への思いやりかも知れないのだが……。

三十歳になる前に、結婚を決めた時、母がほっとした表情を見せたことを思い出す。単に息子の婚期の遅れを心配していただけかも知れないが、あるいは母も少しは重荷を背負っていたのかも知れない。

中学二年生の時に流行っていたテネシーワルツのパティ・ページも逝ってしまった。このテネシー州歌も「失恋の歌」である。野菊の墓も、北上夜曲も、実らなかった「幼い恋」を主題としている。桜貝の歌もそうだ。

七十五歳になった。いつか書き留めたいと思っていた「誰にもあった経験」を「北上夜曲考」を小道具にして書いてみた。それでも、この小文を書くのには、心の負担があった。青春とはそんなものなのだろう。

それにしても人生は不思議なものだ。考えてみれば、現在の幸せは、母が何か言ったお陰でもたらされたのかも知れない。